

仙人せんじん

あくたがわりゆうのすけ
芥川龍之介

みなさん。

わたしは今大阪おおさかにいます、ですから大阪おおさかの話をしましう。

昔むかし、大阪おおさかの町まちへ奉公ほうこうに来た男おとこがありました。名なはなんといいたかわかりません。ただ飯めし炊き奉公ほうこうに来た男おとこですから、権助ごんすけとだけ伝わつたっています。

権助ごんすけは、口入れ屋くちいやののれんをくぐると、キセルをくわえていた番頭ばんとうに、こう、口の世話たのを頼たのみました。

「番頭ばんとうさん。わたしは仙人せんじんになりたいのだから、そういう所ところへ住み込こませてください。」
番頭ばんとうは、あつけにとられたように、しばらくは口もきかずにいました。

「番頭ばんとうさん。聞きこえませんか。わたしは仙人せんじんになりたいのだから、そういう所ところへ住み込こませてください。」

「まことにお気きの毒様どくさまですが、……。」
番頭ばんとうは、やっといつものとおり、話を始めました。

「手前てまえの店みせでは、まだ一度も、仙人せんじんなぞの口入れくちいは引き受けたことはありませんから、どうかほかへおいでなすってください。」

すると権助ごんすけは、不服ふふくそうに、千草ちくさのももひきのひざを進めながら、こんな理屈りくつをい
だしました。

「それはちと話ちがが違ちがうでしょう。おまえさんの店ののれんには、なんと書いてあるとお
思おもいなさる。よろず口入れ所くちいと書いてあるじゃありませんか。よろずというからは、
何事なにごとでも口入れくちいをするのが本当ほんとうです。それとも、おまえさんの店では、のれんの上うへに
うそを書いておいたつもりなのですか。」

なるほど、こう言いわれてみると、権助ごんすけが怒おこるのももつともです。